

# アメリカ聾教育における トータル・コミュニケーションの展開(4)

— 1960年代の聾幼児への指文字導入 —

草 薙 進 郎

## 1 序 言

アメリカ聾教育において、1960年代後半に至って、トータル・コミュニケーションが台頭し、1970年代に入って、急速、急激に聾教育の実践の場に受け入れられていった。

このトータル・コミュニケーションの台頭、展開は、突如として偶発的に生じたものとは思われない。筆者は、トータル・コミュニケーション台頭の要因として、手指法がいかに評価されていたのかを問題として、先に1950年代のアメリカ聾教育における手指法の評価について、① 手指の有効性 ② 併用法・同時法の評価 ③ 手話と聾者の心理的問題 ④ 読話、聴能、発語の評価の視点から考察、検討した。<sup>1)</sup>

そして、1950年代において、すでに、トータル・コミュニケーション台頭の素地となる、手指法に関する革新的な主張、理念が存在していたことを確認した。

本研究の目的は、1970年代のトータル・コミュニケーションの急速な展開の前段階である、1960年代において、アメリカ聾教育の中で、手指法がどのように評価され、実践の場に導入されていったのかを、明らかにすることにある。本稿では、とくに「早期よりの指文字導入の実践」を中心に、分析、検討していくことを意図している。このことは、1970年代の急速な、トータル・コミュニケーションの展開の要因を分析していく上で、重要な手がかりを与えるものと考えられる。

## 2 ソ連の「新口話主義」の紹介

アメリカでは、1878年に、Western New York Institute for Deaf-Mutes (現在のロチェスター聾学校)において、初代校長、Westerbelt, Z. F. が、口話に指文字を併用する、いわゆる「ロ

チェスター法」を新入生に使用し始めた。1917年に、Westerbelt は死去したが、20世紀の前半はこの方法の教育的、心理的な意義について、ほとんど関心が持たれなかった(中野善達)<sup>2)</sup>。

この間の事情について、Moore, D. F. (1978) は、「アメリカにおいて、ロチェスター法は、100年間使用されてきたが、指文字は、幼児の口話の発達を妨害することを恐れて、20世紀において、幼児に対しては、一つの例外を除いて(Hester, 1963)、全く試みられなかった。」と指摘している。<sup>3)</sup>

すなわち、指文字は、20世紀前半においては、アメリカ聾教育の中で、その教育的、心理的な意義が、積極的に評価されず、とくに、「幼児の段階では、口話の発達を妨害する」ことを恐れて、1960年代に入ってのHesterの聾幼児への採用(後述)まで、全く試みられなかったのである。

一方、Moore, D. F. によれば、ソ連の聾教育者は1938年頃、純口話法は失敗であると判定し、第二次大戦後、聾教育は完全な失敗であったという結論を下している。そして、1950年より、併用法(口話と指文字)の評価と、その発展に対する先駆的实践を開始した。そして、1960年代の初期までに、伝統的純口話法に対して、発達の早期から、口話と指文字利用による新口話主義(Neoralism)の優位性が、モスクワ欠陥学研究者の満足する形で成立し、正式に、ソ連の聾教育の中に確立した。<sup>4)</sup>

こうした状況の中で、ソ連における聾幼児への指文字利用の実践が、1950年代末から1960年代の初めに、アメリカに紹介されるようになった。それ以来、アメリカ聾教育において、指文字再評価の気運が高まり、いくつかの聾学校が聾幼児に指文字を導入した試行的実践を開始した。

このソ連の指文字利用の方法が、アメリカ聾教育に与えた影響は、“スプートニク・ショック”と無関係ではなかったと指摘されている。<sup>5)</sup>

実際、1957年秋の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げ成功後、ソ連の聾教育の紹介が、とくに盛んとなってきた。

なかでも、Morkovin, B. V. (1960) による、ソ連の欠陥学研究所のMorozova, N. G. とKorsunskaja, B. D. の、口話プラス指文字利用のいわゆる「新口話主義」による、聾幼児の実践成果の紹介は、著名である。<sup>6)</sup>

この実践は、Morozova とKorsunskaja の指導のもとに、1953-54年より、Leningrad 第一幼稚園と、モスクワ地区のMalakhovka 幼稚園において、数名の教師によって試みられた。この実践の目的として、

① 最も必要な時に、聾児のコミュニケーション語いを拡充すること

② 会話でのスピーチと読話の発達を促進すること

③ 言語指導を、子どもの活動から生来する、直接的感覚経験を通して発展せしめること

の3点を挙げている。そして、発達の当初から、この方法を採用することによって、もたらされる利点として、

① 発音をマスターする以前でも、言語による、コミュニケーションと発達の方法が獲得できる

② 言語使用と言語的思考は、普通児の活動への参加を促進する。これによって、社会的ニードが充足される。

③ ロシア語は、高度に音声記号的(phonetic)である。すなわち、スペルどおりに発声されるので、指文字はとくに、有利である

④ 指文字は、発語と読話を妨害しない。逆に、指文字は、発達の早期に、単語の音と文字を弁別するのを助けると共に、語いを拡充するので、スピーチと読話の進歩が、大いに促進される

⑤ 明瞭なスピーチと正確な読話を獲得するにつれて、子どもは、容易に指文字を省略して、口話でコミュニケーションするようになる

という点が、確認されたとしている。

とくに、Morozova らは、コミュニケーション

のための効果的言語の学習は、聾児の全体的な知的構造と能力を再構築するのに、決定的影響を与えるという仮説から、言語の早期獲得の重要性を強調している。

この実践は、3年間にわたって、継続して行われた(1年目3~4歳の12グループ、2年目4~5歳の8グループ、3年目5~6歳の4グループで、1グループは10~12名)。プログラムの主要な領域は、次の3点であった。

① 生きた会話を促進するための自然な場面と活動の利用。

② 語音の発音を完全にするため、および基本的概念を発展させるために特別なレッスンの工夫。

③ 音楽リズム、絵画製作、遠足を通して、予想、想像、関心を広め、イラストされた童話、物語、民話に親しむようになること。

1年目は、3~4歳の12グループ(1グループは10~12名)を対象に、言語面については、語いの拡充を中心に指導された。2年目は、4~5歳8グループに対して、さらに、単語の読み、書き、綴りが導入され、文法形式に従って表現することが教えられた。3年目は、5~6歳の4グループに対して、言語の効果的使用に力点がおかれ、基本的文法規則も教えられた。

この3年間の実験に基づいて、聾幼児の言語発達は、従来の口話法による結果と比べて、著しい進歩がみられたとしている。

なお、この論文の紹介の末尾に、サンフランシスコ州立大学助教授(教育学)のPriscilla Pittengerのコメントが掲載されている。Pittengerは、この実験的指導について、子どものコミュニケーションが、急速に発達したのが、指文字によるのか、実験グループの学習計画が変更されたことによる学習内容のレベルアップによるのか、疑問であると述べている。また、ロシア語に比べ、英語のような非音声的言語(non-phonetic language)では、この実践の仮説は、それほど妥当ではないと指摘している。

こうした批判にもかかわらず、このソ連の新口話主義のアメリカ聾教育に与えた影響は、大きなものがあつた。

このほかにも、いくつかの、ソ連の聾教育の紹

介がみられる。

Hunt, J. F. (1959)は、1958年のソ連訪問の視察に基づいて、報告をしている。<sup>7)</sup> その中で、欠陥学研究所 (Institute of Defectology) や聾学校、教師養成、職業訓練についても述べているが、手指利用の問題については、次のように報告している。

「聾のハンディキャップを克服するために、ソ連で広く使われている方法について、337番モスクワ校の校長、Mikalgan Karpavdivich は、それは、指文字、“自然的”手話、スピーチ、読話、残存聴力の活用の併用であり、各々の比重は、子どもの入学した学校で一般に使われている方法のほかに、子どものニーズによって決定されると説明した。同校長は、過去においては、完全な口話法で指導されたが、すべての子に満足でないことがわかったと言っている。」

また、3歳以後失聴およびスピーチの障害の児童のための、モスクワ第2聾哑学校に関連して「この種の学校では、第1学年において、手話と指文字が教えられる。教師用の絵による手話の辞典が、モスクワ欠陥学研究所より発行されている。校長は、手話と指文字は、将来、単語の語尾や言語の文法的構造を理解するための補助として教えられると強調した。」と報告している。

このようなソ連の新口話主義の報告を一つの契機として、アメリカにおいて、聾幼児への指文字導入の主張、実践が、1960年代に入って、次第に盛んとなってきた。

### 3 聾幼児への指文字導入の実践

前述のように、アメリカ聾教育において、指文字の聾幼児への早期導入は、20世紀前半においては皆無であった。口話での成績が伸びない者に対して、小学部後半あたりから、併用法という形での指文字の使用は存在していたと言えるが、幼児への指文字の導入は、口話の発達を妨害するという理由で、長い間否定され続けてきた。

ところが、1960年代に入って、前述のような経過によって、ニュー・メキシコ聾学校、ルイジアナ聾学校、フロリダ聾学校等が、聾幼児に指文字を導入した実践を意図的に展開し始めた。

#### (1) ニュー・メキシコ聾学校の実践

当時、Hester, M. S. が校長であった、ニュー・メキシコ聾学校では、発達の早期からの指文字導入の実践を、すでに1959年より開始している (Hester, M. S. 1963)。<sup>8)</sup>

同校では、多年、10~12歳頃より、指文字を使用してきたが、発達段階の早期から、指文字を導入することになった原因は、卒業生徒の学業成績の不振、コミュニケーション能力の不完全さに対する反省と、その改善策の一つとしてであり、何か新しい試みをしなければならないということにあった。

しかし、幼児の段階よりの指文字の導入に対しては、伝統的な口話法からはずれることに対する教師の抵抗、教師の指文字能力の不足、子どもがマニュアル・コミュニケーションとかかわることを希望しない親達の反対という、多くの困難が存在した。とくに、指文字反対者の多くは、指文字使用が、読話とスピーチの発達を妨害し、阻止すると考えていたが、同校では、いくつかの研究報告と原理に基づいて、指文字の採用を決定している。

指文字の本格的採用の主要な根拠となったものは、次の事柄である。

① 1948年のJohnson, E. H. のコミュニケーション手段 (読み、スピーチと聴覚、読話、聴覚と読話、指文字、手話と指文字の併用) の比較研究の結果、指文字が、最も満足できる、コミュニケーション方法であることが判明した。

② ソ連の聾幼児への指文字導入の実践結果の好成績を知った。イリノイ大学障害児研究所長、Kirk, S. 博士らが、1962年に訪ソしているが、その報告を個人的に聞いたり、1960年のMorkovinの論文に刺激を受けたりした。

③ 従来の論文にみられる、読話の不完全性、不確実性と読話能力の習得困難性についての主張 (Levine, E. S. 1958, Scouton, E. L. 1962など) や大脳生理学的にみた言語発達の最適期の理論 (Penfield, W. ら, 1959) をふまえて、英語の言語体系 (シンボル体系) を、早期から獲得させねばならないと考えた。

とくに、Lowell, E. (1959) の読話実験の結

論、すなわち、言語能力が、読話での成功の最も重要な鍵であるという点を考えたとき、「我々は、(中略)もし、読話が言語を教える手段だとすれば、読話を主たる手段として、英語を聾児に教える試みは、悪循環と呼ばれるようなことを実践してきたことになると思われる。」と述べている。

同校での指導法は、一般に、単語をスピーチと同時に指文字で、聾幼児に与える(例えば、「ボール」「魚」など)。子どもらは、スピーチと指文字をプロセスとして、言語の理解から表現へと進む。

指導の成果については、スタンフォード学業成績検査とメトロポリタン読書検査の結果、スピーチと指文字を同時に使う方法は、過去何年間も行ってきた実績よりも、優れた言語能力を児童(10~12歳)に与えることが示されたと思われる、と述べている。また、読話検査を、1963年に二つのグループに対して実施している。すなわち、指文字による指導を1959年より約5年間受け、1963年(検査の実施時)に、10~12歳になったグループと、11~12歳まで、指文字を教えられなかったグループ(14~16歳)についてである。その結果、指文字とスピーチを同時に与えられたグループの方が、読話能力において、より優れていることが判明した。

Hesterは、最後に、この方法の意義を大いに認めつつも、さらに、より客観的な評価のもとに、その有効性が検討されるべきであると結論づけている。

## (2) ルイジアナ聾学校の実践

ギャローデット大学予科部長のScouten, E. L. (後のルイジアナ聾学校長)は、1960年に、聾幼児への指文字(ロチェスター法)導入を提唱している。<sup>9)</sup>

彼のロチェスター法導入の根拠は、口話法での読話の困難性、不完全性を指文字で補ない、英語の完全な文型(ブロークンでない文型)を子どもに理解させ、スピーチで自分の考えを表現できないときは、指文字で表現させることにより、早期から言語能力を確立することにある。そして、指文字は、英語表現の一形式であり、指文字の導入は、けっして、スピーチを妨害しないと指摘する。

彼は、さらに、スピーチでも指文字でも表現で

きない子どもは、パントマイム、手話、描画で自分の考えを表現するように励まされるべきだとまで述べている。これは、後のトータル・コミュニケーションの理念に通じる主張として注目される。

さて、Scoutenは、1963年には、ルイジアナ聾学校長となっており、指文字導入(ロチェスター法)の教育実践を開始している(1967)。<sup>10)</sup> 彼は、ルイジアナ聾学校の方法を、「口話多感覚法」(an oral multisensory procedure)と定義している。この方法は、要約すれば、次のようなガイドラインに基づいている。

① 普通は聴覚を通して獲得される英語は、言語獲得前の聾児のためには、視覚的に受容可能とならねばならない。読話は、非文法的受容手段であり、その不完全性は“聾言語”(deaf language)の原因となる。

② 言語獲得前の聾児に対する、すべての言語指導の強調点は、語いよりも、シンタックスを通しての、概念の発達に置かれなければならない。

③ 常に、子どもの注意の焦点は、けっして、手ではなく、話し手の唇に置かれるべきである。手は、唇の動きの補助として、視覚の周辺においてのみ、認知されるべきである。話し手は、単語を口頭で発音しながら、単語を指文字で表わす。

④ 構音、または、スピーチは、聾教育における重要な目標ではあるが、それは、より基本的な目標、すなわち、言語獲得と混同されてはならない。

⑤ スピーチの発達における、言語獲得前の聾児の進歩は、モチベーションに依存しており、それは、まず、スピーチのレディネスの状態に左右される。この方針のもとで、“見える”英語の概念、シンタックス、語いの、一貫した、早期からの導入は、ただちに、子どものコミュニケーション手段への個人的ニードの空白を満たすことが、観察されてきた。

⑥ 手話言語、および読話での補助されない唇の動きから成る、異質な言語は、言語獲得前聾児の学校や家庭では、存在しえない。見える英語以外の他の言語の採用は、子どもの正しい英語の獲得にとって、有害である。

⑦ 言語獲得前聾児の身体的なスピーチの達成

目標は、スピーチ産出の正常性(normality)ではなく、明瞭性(intelligibility)にある。また、音の増幅(残存聴力の最大限の活用)の役割は、特に重要である。

⑧ 夏休みや、週末、休日に家で「見える英語の前線」を支えるために、教師と大きな教育的責任を分担していることに、両親が気づくようにさせねばならない。

こうした、ガイドラインのもとに展開している実践について、Scouten は、結論として「より完全な言語獲得を、子どもにとって、正に理想ではなく、自然な、もっともな目標としたことは、事実として証明できる。」と述べている。

Scouten は、指文字を口話の補助と考へ、ロチェスター法を、口話法であると規定している。このことは、前述のように、彼がルイジアナ聾学校の方法を「口話多感覚法」と定義していることからもうかがわれるが、1963年の論文の中でも、次のように述べている。<sup>11)</sup>

「時として併用法と呼ばれている、ロチェスター法は、口話法である。しかし、それは前述の方法(筆者註、口話法)とは、一つの点で違う。それは、この論文の中心的関心事である、読話の補助としての指文字(指話法または手指アルファベット)の採用という点である。」

また、彼は、「手話言語」については、前述のように、正しい英語の獲得に有害であると断定している。同じ論文で、彼は、このことについて、次の点を指摘している。

「口話学校での指文字の使用は、長い年にわたって確立された方法であるが、指文字を教科指導法の統合された部分として必要とするという理念に、なじみのない口話主義者に、かなりの驚きと疑問を、しばしば生じさせる原因となる。ほとんどの場合、この憂慮は、指文字を『手話言語』という、コミュニケーションの非言語的、表意的様式(mode)と誤解することから生じる、一つの特別な混同から派生する。」

#### (3) フロリダ聾学校等の実践

Scouten は、後に、フロリダ聾学校長となったが、同校においても、彼は、指文字の導入を提唱している(1969)。<sup>12)</sup>その主張とその論拠は、先

の論文と基本的には変わらないが、とくに、次の点が指摘できる。

① 聴覚活用は、教育的、心理的に重要であるが、指文字、読話と同時に利用されることによって、重要な受容経路となるので、補聴器のみでは、ほとんどの場合、音声による全体の文を伝達しない。

② 読話の重要な前提は、我々、聞こえる者の、素朴な、習慣的な見通しからではなく、聾者の見通しから、第一に考慮されるべきである。

このほかに、指文字の導入は、一般学校の聾学級においても見られる。Ohio, Painesville の聾通学学級の担任、Stafford, C. は、彼女の口話学級で、スピーチと共に指文字を使用することを実施している。<sup>13)</sup> その結果について、彼女は、「指文字は、我々の教室においては、まさに、コミュニケーションのもう一つの手段である。唇の上では見えないシラブルが、単語の指文字の中に含まれるので、スピーチや文字の綴りに役立ってきた。このクラスは、以前よりも口話的であり、リラックスした雰囲気は、より良好な学習に確かに貢献している。」と結論づけている。

さて、こうした、指文字に対する関心の高まりの中で、Quigley, S. P. (イリノイ大学特殊児童研究所) は、ロチェスター法の検討に着手し、1969年「聾児の言語、コミュニケーションおよび教育業績の発達に及ぼす指文字の影響」という報告書を公表した。<sup>14)</sup> 1963年当時、「ロチェスター法」を体系的に採用していた、三つの寄宿制聾学校、すなわち、ロチェスター聾学校、カリフォルニア聾学校(リバーサイド)、ニュー・メキシコ聾学校を実験群とし、他の三つの寄宿制聾学校を対照群として、比較検討した。その結果、指文字の使用が、幼児にも可能で、「万能薬」ではないが、言語、コミュニケーション、教育的発達に有効な働きをしていることを明らかにした。

#### 4 新口話主義の影響と指文字導入の特徴

前述のように、ソ連でのいわゆる「新口話主義」による聾教育が、アメリカ聾教育に与えた影響は、すくなくともある。いくつかの聾学校が、ソ連の新口話主義の教育の報告を契機として、口

話にプラスした指文字の早期導入を実践化したことが、このことを裏付けている。

#### (1) 新口話主義の影響

ソ連の欠陥学研究所の Morozova, N. G. らの研究が、とくに、アメリカにおいて注目されたのは、① 指文字導入によって、聾幼児の言語発達および、コミュニケーションがめざましく、改善されたこと ② 指文字の導入は、従来の伝統的な考えと異なり、口話を妨害せず、むしろ口話の発達を促進すること ③ 早期よりの指文字導入により、自国語の言語体系を習得させること、にあったと思われる。このことは、ニュー・メキシコ聾学校ほかの実践の中でも、これらの事実が、その実践の主たる根拠および、方針とされ、実践の成果として確認された内容であることから、推察することができる。

すなわち、ニュー・メキシコ聾学校では、指文字のコミュニケーション手段、および読話の補助としての有効性に着目し、早期から英語の言語体系を獲得させねばならないと考え、実践を展開している。その結果、学業成績検査、読書検査、読話検査において成績の向上がみられ、指文字導入の成果が確認されている。

ルイジアナ聾学校、フロリダ聾学校においても、Scouten の指導のもとに、実践が展開しているが、ニュー・メキシコ校の場合と同じく、読話および聴覚活用という非文法的受容手段を、指文字で視覚的に可能にし、英語の文法規則に従った形で、コミュニケーションを成立させようと意図している。こうした結果、より完全な言語獲得を、現実的目標として設定したことを、事実によって証明できたと強調している。

とくに、従来、指文字（または、手話）の早期からの導入は、聾幼児の発語、読話という口話能力の獲得の妨害となるという主張が手指法排除の大きな根拠とされてきたのであるが、このことの実証が、いくつかの聾学校の教育実践を通して、次第に明らかにされてきたことが、きわめて教育的に大きな意義を持つことになったと思われる。

#### (2) 早期よりの指文字導入の特徴

このように、ソ連の新しい試みが、アメリカ聾教育に与えた影響は大きなものがある。しかし、

アメリカ聾教育の中で、1878年のロチェスター法開始以来、指文字利用の方法が、ロチェスター法、併用法、同時法という形で存続してきたこと、および1950年代において、手指法再評価の教育思潮が存在していたことを指摘しておかねばならない。

このような意味から、ソ連の指文字利用の教育実践の紹介は、“スプートニク・ショック”の一環として、アメリカ聾教育に大きなインパクトを与えたのは事実であるが、その実践は、本質的には、アメリカ聾教育独自の歩みであることには、かわりはない。

そこで、次に、両者の共通点と、アメリカ聾教育における指文字の早期導入の特徴について検討したい。

まず、新口話主義の教育も、アメリカの指文字の早期導入も、従来の聾教育の成果に対する疑問、反省から、その解決策として導入されてきた点で共通している。そして、その解決策を、口話法の修正、すなわち、口話法の補助としての指文字導入という方法に求めた、と言える。

ソ連の「新口話主義」は、その名称にあるとおり、口話法を標榜しており、従って、手話言語（sign language）に対しては、否定的態度を示している。このことは、次の Morkovin の記述からもうかがえる。<sup>16)</sup>

「モスクワ欠陥学研究所の“指文字を伴うスピーチ”（dactyl speech）の利用は、正に最初から、それを読話とスピーチに置き換えるために、導入されるので、“併用的”ロチェスター法と同一のものではない。指文字は、難しい、新しい単語と概念のための補助として使われる。しかも、ソ連の研究者は、どちらの側からも、言語とはみなされていない手話言語を否定している点で、ロチェスター法の熱心な信奉者であると、一致して考えられている。」

一方、Scouten は、ルイジアナ聾学校の方法を、「口話多感覚法」と定義している。両者とも、口話法であるという点で一致している。口話主義者に言わせれば、両者とも、口話法であると判定するには異論のあるところであるが、「指文字が、口話と共に使われることにより、口話の発達を助長す

る」という意味において、口話法であるという見解も成り立つわけである。この点に関して、Hester は、ニュー・メキシコ聾学校の方法については明言していない。

さて、以上みてきた、アメリカ聾教育における「早期よりの指文字導入」において、特に注意したいことは、指文字の使用が「口話の補助」として位置づけられていることである。指文字は、口話のコミュニケーション手段としての不完全性、非文法性を補い、口話能力の発達をめざして、使用されるということである。とくに、Scouten の主張に、この色彩が濃厚である。彼は、ロチェスター法は読話の補助としての「指文字の採用」という点で、口話法と異なっているが、「ロチェスター法は口話法である」と位置づける。

こうした考えから、Scouten は、手話言語と指文字の間に、明確な一線を画している。彼は、口話主義者の指文字に対する驚きと疑問は、指文字を「手話言語」という、コミュニケーションの非言語的、表意的様式と誤解することに起因すると強調している。そして“見える”英語以外の他の言語、すなわち、手話言語、および補助されない読話による、異質な言語の採用は、言語獲得前聾児の学校や家庭では、存在しえないし、子どもの正しい英語の獲得にとって有害であると主張している。

次に、指文字を音声言語、換言すれば、英語の言語体系に従って使用するという実践的な意義を見落としてはならない。先にみてきたように、ロチェスター法の教育的意義は、20世紀前半は、ほとんど顧みられず、1950年代に指文字の再評価の気運が高まり、1960年代に入って、聾幼児への早期より指文字導入の実践が、次第に展開する中で、指文字と口話との併用、さらには、英語の言語体系に従った指文字の使用は、現実のものとして、幼児の段落で意図的に追求されだした。

1950年代に、指文字利用の有効性についての主張はあった。また、年長児から、同時法、併用法という名称で指文字が使用されてきたが、それは、消極的な意味においてであった。すなわち、口話の向上が望めない子たちに手指法を導入することにおいてである。

しかし、聾幼児への具体的実践は、近年では、今みてきた Hester の実践が最初であり、とくに、発達の早期からの試行は貴重である。手話言語とは、一線を画しているとはいえ、Scouten の「スピーチでも、指文字でも、表現できない子どもは、パントマイム、手話、描画で自分の考えを表現するよう励まされるべきである。」という主張は、重要である。これは、後のトータル・コミュニケーションの理念に通じるものであると言える。

## 5 結 語

本稿では、アメリカ聾教育において、1960年代に、手指法がどのように評価され、どのように実践の場に導入されていったのかを、「発達段階の早期よりの指文字導入」の問題を中心に、考察、検討した。

アメリカ聾教育への早期よりの指文字導入の素地は、歴史的には、ロチェスター法の流れと、直接的には、1950年代の手指法に関する動向に結びついているが、その契機となったのは、“スポーツ・ショック”にかかわる、ソ連の新口話主義の教育実践の紹介であった。

ソ連の実践の影響を受けて、ニュー・メキシコ聾学校、ルイジアナ聾学校、フロリダ聾学校などが、早期よりの指文字導入の実践を開始した。その意図するところは、口話法の不完全性、不確実性を指文字によって補い、早期より、英語の言語体系を獲得させ、言語能力を確立させることにあった。当然の帰着として、方法的には、指文字は、英語の言語体系に従った形で、スピーチと同時に使用されることになる。

こうした実践の成果として、言語能力の向上、改善が示されているが、とくに、従来の指文字、または、手話の早期導入は、口話能力を妨害するという通説に反証を示したことは、意義深い。

また、注目すべきことは、これらの実践が、手話の導入に対しては、一線を画しており、あくまで、指文字に限定し、口話法の補助として、位置づけている点である。とくに、ルイジアナ聾学校の実践を、Scouten は、「口話多感覚法」と称しており、口話法の中に位置づけて考えている。この点に関して、Hester は、ニュー・メキシコ聾学校

の実践については、明言していない。

さらに、指文字の扱いであるが、ソ連においては「多くの子は、ロシア語の音声・文字形式をマスターするにつれて、指文字の使用は、減少されるか、または、除去される。」(Moore) <sup>17)</sup> という。この点、ルイジアナ聾学校、ニュー・メキシコ聾学校などの実践からは、指文字を除去していく方向は見出せない。ニュー・メキシコ聾学校などは、従来10~12歳頃より指文字を採用していたことを考えたとき、早期導入の意義は認めても、指文字の除去は、当然のこととして、考えられなかったと言えよう。

口話法主流の時代から、トータル・コミュニケーションの台頭・展開へという、アメリカ聾教育の歴史的経緯の中で、早期よりの「指文字」導入が先行し、後のトータル・コミュニケーションの中で、「手話」の早期導入が、試行され、発展してきた点も、また興味深い問題である。

次の作業として、さらに、別の視点から、1960年代の手指法の評価、手指法の教育の場への導入過程について明らかにしていきたいと考えている。

#### 註

- 1) 草薙進郎 (1981) : アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開 (3), 筑波大学心身障害学研究, 5巻1号, pp. 37-46.
- 2) 中野善達 (1974) : ロチェスター・メソッド (佐藤則之先生退官記念の会『言語指導用語解説』日本図書文化協会, pp. 150-152.
- 3) Moore, D. F. (1978): *Educating the Deaf. Psychology, Principles, and Practice.* Houghton Mifflin. p. 202.
- 4) *Ibid.*, p. 183, 200-202.
- 5) Owrid, H. L. (1971): *Studies in Manual Communication with Hearing Children.* Volta Rev., 73-7, p. 429.

- 6) Morkovin, B. V. (1960): *Experiment in Teaching Deaf Preschool Children in the Soviet Union.* Volta Rev. 62-6, pp. 260-268.
- 7) Hunt, J. F. (1959): *Education of the Deaf in the U. S. S. R.* Volta Rev., 61-8, pp. 356-363, 390.
- 8) Hester, M. S. (1963): *Manual Communication.* Proceedings of the 41st meeting of the Convention of American Instructors of the Deaf. pp. 211-221.
- 9) Scouten, E. L. (1960): *Helping Your Deaf Child to Master English through Finger-spelling.* Amer. Ann. Deaf, 105-2, pp. 226-229.
- 10) Scouten, E. L. (1967): *The Rochester Method. An Oral Multisensory Approach for Instructing Prelingual Deaf Children.* Amer. Ann. Deaf, 112-2, pp. 50-55.
- 11) Scouten, E. L. (1963): *The Place of the Rochester Method in American Education of the Deaf.* Proceedings of the 41st meeting of the Convention of American Instructors of the Deaf. p. 431.
- 12) Scouten, E. L. (1969): *The Prelingual Deaf Child and His Oral Education in a New Perspective.* Amer. Ann. Deaf, 110-4, pp. 483-485.
- 13) Stafford, C. (1965): *Fingerspelling in the Oral Class.* Amer. Ann. Deaf, 110-4, pp. 483-485.
- 14) キグレー, S. P. 佐藤則之・中野善達訳 (1971) : 指文字 東京教育大学ろう教育研究室111 p..
- 15) Moore, D. F. (1972): *Neo-oralism and the Education of the Deaf in the Soviet Union.* Exceptional Children. 38. p. 381.
- 16) Morkovin, B. V. (1968): *Language in the General Development of the Preschool Deaf Child.: A Review of Research in the Soviet Union.* ASHA May, p. 196.
- 17) 3) p. 201.



**SUMMARY**  
**DEVELOPMENT OF TOTAL COMMUNICATION IN EDUCATION FOR**  
**THE DEAF IN U. S. A. ( 4 )**

— Introduction of Fingerspelling to Young Deaf Children In 1960's —

SHINROU KUSANAGI

Total communication has been rapidly widespread in education for the deaf in 1970's and a number of schools for the deaf accepted the philosophy and methodology of total communication in U. S. A..

The purpose of this paper is to clarify the educational issue about introduction of fingerspelling to young deaf children in 1960's.

The results studied were summarized as follows:

- (1) " Neo-oralism " in education for the deaf in Soviet Union was introduced to U. S. A. in the latter half of 1950's and beginning of 1960's. Successful results in neo-oralism influenced the reevaluation and the introduction of fingerspelling in young deaf children in U. S. A..
- (2) In 1960's the educational practice adding fingerspelling to oral method in an early stage was carried in New Mexico School for the Deaf, Louisiana State School for the Deaf, and Florida School for the Deaf.
- (3) Characteristics of the introduction of fingerspelling to young deaf children were summarized as follows :
  - A. It was practiced for the purpose of improvement of academic achievements and language ability in deaf students.
  - B. Scouton, E. L. defined the educational method of Louisiana State School as " an oral multisensory procedure ". Scouton, E. L. and Hester, M. S. adopted fingerspelling along with oral method, but did not sign language.
  - C. They aimed at adequate communication with young deaf children by the simultaneous use of speech and fingerspelling.

In consequence, it was clarified that the introduction of fingerspelling to young deaf children influenced the rise of total communication in the latter half of 1960's.

The next study is to make clear the problem of manual approach in education for the deaf in 1960's from other points of view.